

エンリッチド・養豚 Improved Pig-Keeping

豊下勝彦 ポークランドグループ 代表
Katsuhiko TOYOSHITA Representative, Porkland Group



どうもこんにちは。御紹介いただきました、秋田の十和田湖のある秋田県側で養豚をやっております豊下と申します。

うちの豚は、今回、桃豚というブランドで今、市場に出しております。

うちの農場なんですが、平成7年に農場がスタートしました。3つの農場と1つの産業廃棄物処理会社で構成されていて、平成7年にポークランドと、小坂クリーンセンターがスタート、クリーンはふん尿処理だとか産廃の処分、一般廃棄物である小坂町の生ごみの堆肥化などを行っている施設です。それから9年に十和田湖高原ファーム、それから去年ですね、ファームランドという農場、この三つで年間、大体12万頭前後の桃豚が出荷されています。母豚が大体4,800頭おりまして、普通の企業養豚です。【スライド1】



【スライド1】



【スライド2】

細かい話をすると、ポークランドと高原ファームは基本的に通常の企業養豚のウインドレス豚舎で、ファームランドの肥育養豚部門は、ヨーロッパのアニマルウェルフェアを取入れた、肥育の管理をしまして、このあと小針先生のほうから紹介されると思いますが、このような農場を運営しています。【スライド2】



【スライド3】

企業理念を、「農業で幸せになろう」を合言葉に、「共存同栄」「身土不二」「作り手の見える農業」などを掲げて運営しています。【スライド3】



【スライド4】

現在、108名ほどの素人が農業に就職し、サラリーマン的な養豚を行いながら、新たに農業に就職できる仕組みをつくりたく、今いろいろ進めております。【スライド4】農場を運営するに当たっては、基本的に地域循環だとか資源循環だとかを中心に考え、たとえば町の生ごみの処理も、焼却せずに、このクリーンセンターで堆肥化をしています。それから、その堆肥を農家等に使ってもらって、有機栽培を含めた地域での循環の仕組みの一つとし

て、つくっていくという考え方でやっております。

【スライド4】



【スライド4】



【スライド5】

うちの豚は、全農系 SPF 豚です。北海道の上士幌にある原々種豚場、栗石にある原種豚場、秋田の種豚場と経て私の農場に種豚が導入されます。途中から他の豚が入ることはありません。このことで、日本で最初に、生産履歴公表 JAS 豚肉の認証を受けたり、全農の安心システムの認証を受けたりと、トレーサビリティについての取組も推進しています。【スライド5】



【スライド6】

私の農場では、全農等々でやっている SPF という滅菌・抗菌的な生産技術と、BMW というバクテリア・ミネラル・ウォーターという活菌技術という相反する

技術を最初から取り入れて、外から病気を入れない、持ち込まない仕組みで、できるだけ薬を使わず、免疫力を高め、内側から強くするというで進めてきています。基本的にうちは餌に抗生物質、合成抗菌剤等を使わない生産をしております。それをずっと平成7年から続けてきました。私達の会社は、ほとんどが素人ですし、私も豚の経験が全く有りません。元々農協の職員だったんですけれども、秋田の県北地域の屠畜場の再編成で、地元 JA 出資の屠畜場「ミートランド」が建設されることになり、豚の増産が必要になったため、新規に全農 SPF 農場の建設のために色々携わってきたんですけれども、事情があつて農協を退職することになりました。なので私達は、途中の経過や豚舎の設計とかにも携わってこなくて、与えられるがまま、教えられるがままで無我夢中でやってきました。この後、パル・ミートさんのほうからも色々お話があると思うんですが、パルシステムさんとの出会いがあり、生産者の、生協組織だとか、消費者の皆さんといろいろ知り合う流れの中で、今までやってきた生産に対して、いろんな疑問が生まれてきました。【スライド6】



【スライド7】



【スライド8】

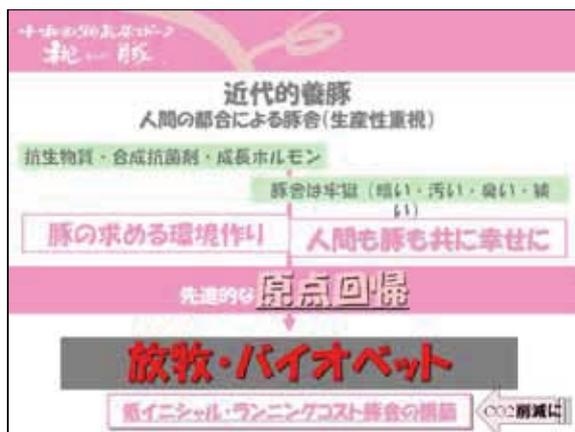
まず、近代的養豚、本当に人間の都合ばかりの生産じゃないのかなというのを感じています。ウインドレス豚舎、あれにかかる電気だとか、いろんなお金をかけて

生産性を重視した生産をしている。管理をしやすくして出切るだけ動けないように密飼いをして、先ほど言った薬をたくさん使って、病気を発症させない生産をしている。これはもう豚舎は牢獄ではないかと。太陽の光もできるだけ当てないようにして温度管理を徹底する。穴を掘ったり走りまわったり水浴びをしたり、豚の欲求する環境を与えていないということに、本当にこういう飼いや方でいいんだろうかという疑問が生まれてくるんです。

【スライド7～9】



【スライド9】



【スライド10】

豚の求める環境づくりをしてあげることによって、豚が快適に過ごせることができるようになったということと、「人間も豚も共に幸せに」と書いていますが、その両立を紹介する仕組みがそれではないかなと。

来年、「なつかしい未来へ 先進的の原点回帰」と掲げて、農場内を改めて再構築します。そのためにやってきていることが、この放牧とか、バイオベッド(発酵床・準放牧)だとかの豚舎の仕組みです。これは最後のほうで紹介するんですが、今後私達の無農場は規模を拡大するつもりでいます。もちろん安いコストで建てられる豚舎、管理の仕組み、ランニングコストの低いですね、電気をできるだけ使わない、いろんな意味でコストの安い豚舎になるべきだと思っています。【スライド10】



【スライド11】

これ今やっている、バイオベッドだとか放牧とかの写真です。

このバイオベッド豚舎は平成15年に、最初こんな感じで建てて、1メートル50ぐらいの発酵床を盛って、こういう形でつくりました。【スライド11】



【スライド12】

それから2年たって、平成17年に、これはドームなんですけれども、南極とかでも使っている耐雪性のドームで、発酵床が堆肥を使ったものです。

これは18年ですね。これは、もともと堆肥舎だったところを改装して、ここで600頭飼っている豚舎です。

あと、ここの材料とかをずっと変えて、平成20年には第6期目になりました。

今期は、バイオベッドの床材をおが屑とかもみ殻だとか、それから乳酸菌、納豆菌、酵母とかいろいろ使いながら発酵させ、豚舎の床材として使っています。

【スライド12】

あと、もう一つは放牧、うちの敷地が大体70町歩ぐらいあるんですね。その空き地があります。そこを使って1,600頭の放牧をしました。よく見てわかるとおり、3日でこのラインの雑草がなくなってしまうという、大変な開墾能力です。

今、普通のウインドウレス豚舎の管理と柵を無くした400頭の群での管理、発酵床と400頭の群での管理



【スライド 13】

のバイオベッド（準放牧）、それから放牧と、四つの管理をためしています。今年から、放牧とバイオベッドは、アニマルウェルフェア・チャレンジ・ブランドという名前でパルシステムさんのほうで販売を試験的にしています。【スライド 13】



【スライド 14】

また、今年からは、繁殖から分娩までの一貫でウェルをやるとういうことで、既存の豚舎をちょっと改造した仕組みと、先ほどのバイオベッドの仕組みを使って、子豚 300 頭前後のところを実験で進める予定です。【スライド 14】

今、12 万頭ぐらいの出荷を、32 万頭の生産に進めていこうという流れの中で、こういうアニマルウェルの取り組みを全体的に農場で取り入れてやっていこうとしています。この中で、どうしてもやっぱり豚の生産というのが基軸になるものですから、今後はバイオも含めた放牧をメインに、もう 20 万頭ほどの生産をしていきたいと進んでおります。基本的に懸念される材料として、豚の生産の効率が落ちるとか言われますが、そういうことにはなりません。遠回りになりますが結果、効率は下がらず生産は可能だと考えています。それだけではなくて、先ほども人間が幸せにと書いていましたが、非常に飼う側が幸せな気持ちになれるということ



【スライド 15】

で、自分たちには逆にうれしい結果だと思しますので、今後ともこれをずっと進めていながら、逆にこの仕組みが自分らの主流になるようにこれから進めていきたいと思ひます。以上で終わります。【スライド 15】【スライド 16】



【スライド 16】

○二宮 茂

ありがとうございます。続きまして、小針大助氏からの講演なんですけども、プロフィール。1999 年新潟大農学部卒業されまして、東北大学大学院農学研究科博士課程に進まれて、2004 年に博士号を取られました。同年、茨城大学農学部附属農場助手に採用されまして、現在、茨城大学農学部附属フィールドサイエンス教育研究センター講師をやられています。主な研究対象は、肉牛と豚ということで、きょうは豚のお話になります。